

Title	ハンナ・アレント著 寺島俊穂訳 『ラーヘル・ファルンハーゲン： あるドイツ・ユダヤ女性の生涯』
Sub Title	Hannah Arendt, "Rahel Varnhagen : Lebensgeschichte einer deutschen Jüdin aus der Romantik", übersetzt von Toshio Terajima
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1987
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.60, No.5 (1987. 5) ,p.132- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19870528-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

託して物語らずにいられなかった。

こうした折、彼女を最もよく理解してくれた親友、アンネ・メンデルスゾーンが所持していたラーヘル日記と書簡がアレントに譲られた。彼女は、大学でロマン主義についてのモノグラフを書きながら、ラーヘルを読んで自分と同じ人間的な感受性と脆弱さを見出したのであった。ヤング・ブルユールは、『醫』におけるアレントの自画像の描写と『ラーヘル』におけるそれとに、類似した表現を認める。それは、フィンケルシュタイン伯爵との恋に破れて、ひと時、絶望におちいったラーヘルの姿に投影されている。フィンケルシュタインは「身分と家族」のために、ユダヤ娘との結婚を拒絶して、ラーヘルを去っていった。これを契機に、彼女は「特定の個人」となり、人生というものを知った。愛を拒まれることよって、彼女は「物心ついてから、忌わしい生まれに生まれついたときから、当然そうなる」と決まっていた「運命を確認した」。「彼女は自分の運命に対抗できるものは何ももっていなかった。彼女には「眞実を言うこと」、証言すること、〈絶望のすばらしい収獲〉をかり集めることしか残されていなかった」(六一頁)。このようにラーヘルを語る言葉は、アレント自身の言葉である。ハイデガーの魅惑から解き放たれる以前に、アレントは『ラーヘル』を書かなければならなかったのである。

アレントとラーヘルとの「情熱的な個性」の同一性について、これ以上立ち入ることは差し控える。われわれは「ラーヘル自

身が知っていた以上のこと知ろうとする必要はないし、彼女が知り、体験したのとは別の運命を想像によって考えた観察をもとにしてつけ加えることはできないからである」(二二頁)。ただし、ヤング・ブルユールがハイデガーとの思想的連関に触れて、次の点を指摘していることに注目しておく。アレントの博士論文(彼女は、ハイデガーの紹介によって、ハイデルベルクに移り、ヤスパースの指導のもとに「アウグスティヌスにおける愛の概念」を書いた)における愛の三つの概念——欲望としての愛、神への愛、隣人愛——は、「存在と時間」における根本問題である「時間的実存の現象」として提示されており、それらを織りなす言語は、まさにハイデガーに負うている。しかしながら、ハイデガーの時間概念が死の未来体験へと志向しているのに対して、アレントのそれは生誕へと志向していて、彼女はハイデガーとの「批判的距離」を發展させつつあったことをうかがわせる。なによりも重要なのは、「ハンナ・アレントは、その博士論文を執筆しながら学んだ——読むことからではなく、生きることから学んだことは、生まれながらにして自分はユダヤ人であるということであった」。

もとより、本書はラーヘルの数々のロマンスの物語ではなく、彼女の愛すらも主題ではない。確かに、誰が読んでみても明らかにように、本書は、「昼と夜」という彼女の不気味な内面的風景を語る夢物語をほぼ中間にはさんで、前半はフィンケルシュタインおよびウルキホとの恋愛事件を、後半はファルンハーゲンと

の結婚生活を中心に、彼女の周辺の人びととの交流、彼女が遭遇した政治的事件、戦争の体験とともに、その生涯を編年的につづっている。だが、彼女のユダヤ女性としての愛を通して明らかにされるのは、「ユダヤ人であること」の意識の遍歴、アクチュアルな同化の問題にはかならない。アレントが明瞭に述べているように、この伝記は、「ドイツ・ユダヤ人の没落を意識して書かれたもの」であり、「ここでは周廻の世界の精神的・社会的生活へ同化することが具体的にどのように個人の生活史において成し遂げられ、個人の運命になったかという同化の問題のひとつの側面」(二一頁)が取り扱われている。したがって、ユダヤ人一般ということではなく、しかもあらかじめ注意しておくべきことは、「同化は、もっぱら裕福なユダヤ人だけのことであった」(二七五頁)ということである。ともかく、こうした視点から、ユダヤ女性として「不運なる者」(Schleimig)の、まさしくその深い宿業ともいべきものの一端を以下に記しておく。

ラーヘルは、一七七一年五月十九日、宝石商レヴィ・マルクスの子としてベルリンに生まれた。当時ドイツにおけるユダヤ人は、「人間文化の下の等な段階」にとどまっているものと見なされ、彼らの政治的・社会的状況は何世紀も変わぬまま、どこでも抑圧され、迫害されるのがつねであった。ユダヤ人の旧約聖書は過去のものであり、「文化財」でしかなかった。「ユダヤ人があること自体悪いことなので、彼らを人間、すなわち啓蒙主

義の人間にすること以外何も残されていなかった」(一八頁)。だが、ベルリンのユダヤ人サロンは社会の外にある、社会的空間であった。「ベルリンの例外的ユダヤ人は、教養と富の追求という点で三〇年間にわたって幸運を得た。ユダヤ人サロンは、繰り返し夢みられた社会の人種的混成の牧歌であり、社会の移行期に産み出された偶然的状況の所産であった」(六四頁)。そして、「イェーガー街のラーヘルの屋根裏部屋は、この当時のベルリンのあらゆる階層の人びとでにぎわっていた。彼女の「ユニークな天分」は人を惹きつける魅力のようなものになり、……実際彼女は、しばらくの間ユダヤ女性であることを自慢していた」(六二頁)。

しかしながら、このような時代は二度と来なかった。ラーヘルは、父の死後は財産を分与されず、裕福でもなく、教養もなく、美貌でもなかった。彼女は、ユダヤ人であることから抜け出たがった。フリードリヒ二世治下のベルリンでは、ユダヤ人は、全体としての解放を求めようとしたのではなく、「個人的解放」のみを望んでいた。女性としてのラーヘルにとっても例外ではなく、彼女の場合、ユダヤ人であることから抜け出すためには、「結婚による社会的同化」(四三頁)のほかに考えられなかった。先述したフィンケルシュタインとの婚約は、まずそのような試みであった。「彼が彼女の前に現れたこと、彼が彼女を愛したことは、偶然であった。……彼女が彼において愛したの(偶然)であった。偶然によって以外ではどのようにして世

界が彼女に近づいてくるというのか。……ともかく何かを体験し、人間となるチャンスのために彼女はすべてを投げ出し、結果がすべてわかっていたとしても、敢えて偶然に自分を賭けた」(五〇頁)。フィンケルシュタイン家は、ハルデンベルク・シュタイン改革と闘ったプロイセン地方主義の陣営に属し、家父長的で保守的な家族であった。ラーヘルは伯爵夫人になるはずであったが、「世界にはいろいろとした彼女の意志ははつきりと拒絶され……世間の敵意を一般的形では知っていたが、それを自分を襲った個別的な敵意として実際に確かめた」(六〇頁)。結婚に失敗した彼女は、常に恥辱に耐えなければならなかった。ラーヘルとの恋は、スペイン公使館秘書官ウルキホとであった。彼女は「美しい魔術」にかかることによつて、全面的に屈服し、なんの教訓も得なかつたかのように、ウルキホの虜になり、自分自身から解放されたのである。彼女はユダヤ人であることすら忘れたのであろうか。「ウルキホは外国人であり、彼にとつてラーヘルはユダヤ女性ではなかつたので、彼の前で彼女は自己正当化する必要はなかつた。もし彼女が自己正当化しても、彼は全く理解しなかつたであらう」(九四頁)。彼女は忌わしい運命の代りに、自己自身の心を示したいと思つた。しかし彼は逆に、女性一般、女性の義務、女性の男性への隷屬といった考えを抱いていたにすぎず、彼女はウルキホに平凡な人間を見出し、みずからの愚さに気付く。だが、美しき人に身を委ねる幸福を彼女は最初にして最後に経験した。「彼女はその後

の人生でもう誰よりも彼より強く愛することができなかつた。ウルキホとの別れは、魔術を呪いに変えた」(一〇六頁)。そして、「ラーヘルは、自分に起つたことで積み木をしなから世界と事物を情け容赦なくわきへやり、それらのつながりを引き裂き……悲しみに狂いそうな心に気晴らしを与えた。絶望と気晴しは非常に近寄つたので、その驚くべき、身の毛もよだつ混合のなかでのみ人間存在一般の幻のようなものが彩られた。そしてそれは、すべてが無意味になつた人の正確な芸術家のような手の前で呪文によつて呼び出された。それは狂気ではなく、彼の幻影でしなかつた。……彼女の人生は、彼女にとつて物語になつたのである」(二〇七頁)。このような時に、彼女を導いてくれたのはゲーテであつた。「力強く、健全に、ゲーテはわたしが粉々にした幸福と不幸、それにわたしが明らかに保持できなかったものを集めてくれました」(一一五頁)とラーヘルは述懐する。それは「大いなる憐憐」であつた。

ラーヘルは、一八一四年に洗礼を受けて、アウグスト・ファルンハーゲンと結婚する。彼女は四十三歳の時であり、夫は彼女より十四歳も若かつた。ファルンハーゲンはベルリンの軍医学校で医学を学んだが、途中で彼の友人シァミッソーとともに文学作品を作ることから知的漂泊がはじまり、ハレではシュライエルマッハ、ヴォルフ、シュティフティン等と交わり、「教養」を身につけた。彼は、ナポレオンによつてハレを追放された学生の一で、ベルリンでラーヘルと知り合つた。彼の文学的・

哲学的知識は皮相なもので、表わすものは何もなく、何も持っていない人間であった。「わたしは、何かが起るのを待っているだけです。わたしは道端の乞食なのです」（一四六頁）と自分を叙述している。ラーヘルは、ファルンハーゲンを愛したことはなかったが（二〇五頁）、彼の「理解力」と「言葉による人間的な意志疎通」のおかげで、彼女は救われたのである。「ファルンハーゲンの理解力は……彼女との永年にわたる友情と結婚生活との普遍的な基礎になった」（二五三頁）。「ラーヘル的人生は、ファルンハーゲンにとって彼女の人格を放射するものになった」（二四九頁）。彼女は、この「道端の乞食」にすべてを賭けた。ファルンハーゲンは、一八〇九年のオーストリアとフランスの戦争に志願し、歩兵部隊に入つて、ヴァーグラムの敗戦を身をもって体験する。これが、彼の出世のチャンス糸口となつた。一八一三年の解放戦争の時には、「皇帝ロシアの大尉」という地位を得た。ウィーン会議では、ハルデンベルクの秘書を務め、後にハルデンベルクからバーデン駐在のプロイセン代理公使に任命された。

こうして、ファルンハーゲンは「成り上り者」(Patron)として社会に受け容れられた。ラーヘル——今や彼女はフリードリケ・ファルンハーゲン・フォン・エンゼ夫人である——は、小役人としての名譽心に留まっていた「ファルンハーゲンに不満であり、「候爵夫人」でありたかつた。依然として貴族中心の社会においては、成り上り者となつて階梯を昇りつめるよりほか

なすよしもなかつた。ラーヘルは、「貴族からいろいろなる理由から一時承認された同化の第一世代に属する」（一七六頁）ことに成功したわけであり、バーデンという異国の地で、プロイセン女性に昇進し、「忌わしい生まれ」という痕跡は何も残されていなくかと思われた。ともかくカールスルーエでの三年間は、彼女にとって「最も幸せで、侮辱されることの少ない時期」（二〇四頁）であつた。間もなく、ファルンハーゲンは解任され、二人はベルリンに還帰する。しかし、彼らは、君主を神聖視し、君主の恩恵によつて貴族の地位に引き上げられたという願望のために、今度は「文学的業績」をあげようと努力した。「ファルンハーゲン夫妻は、外交官としての出世に失敗したあとと文学に身を投じ、三〇年前のラーヘルの屋根裏部屋とは全く違ふ意味をもつ、ベルリンのゲーテ崇拜の中心を形作つた。成り上り者の流儀によつてベルリンのゲーテ崇拜の背後に隠されていたものは、若きハイネのほか誰も気付かなかつた」（一九七頁）。ラーヘルがハイネと知り合つたのは、一八二一年の春であつた。彼女自身にしても、この「隠されていたもの」の嘘に充分気付いていた。成り上り者にならずには、侮辱から逃れられなかつたとしても、成り上り者になるためには、「真実」を犠牲にしなければならなかつたからである。彼女はもはや、偽りの「自己証明」などしたくはなかつた。改名して「外面的に別の人物」ベルリンになつて、一体何を变えるつもりであつたのか。「わたしは一生涯自分をラーヘルだと思ひ、ほかの何者とも思わなかつた」

(二〇四―五頁)。「情熱的なプロテスト、すべてを元に戻し、達成したことを全然望まなかったこととして否定するそのような怒り狂った試み」(二〇五頁)が、彼女を異様な若さに保たせたといえ、ファルンハーゲンのサロンにすわっていても、彼女は、昔の「青春時代の仲間たち」と暮しているのではなく、次第に忘却されてゆくであろう。ラーヘルはゆっくりと、少しずつ理解力を身につけ、全体を理解し、生涯の終りになってやっと自己自身の「挫折」の原因を認めたのである。「わたしは、全能の神に誓って人生において自分の欠点をひとつも克服しなかったと言ふことができます」(二〇二頁)。

ラーヘルは年老いていった。彼女が望んでいたのは、「ユダヤ人憎悪と貴族の高慢さが衰えていき、最後の炎となって燃え尽きる」(二二六頁)ような進歩した世界であり、そこで彼女は幸せに年をとれるであろう。そのような彼女は、「若きハイネを情念と大きな友情をもって歓迎した。ヘガレー船の奴隷だけがお互いを知っています」(二一八頁)。ハイネのユダヤ人であることの肯定は、ラーヘル否定と同じ理由、同じ真実から発している。かくて、「本当に歴史的な意味で、〈彼女の魂の像〉を救ったのは……ヘユダヤ人とその市民的平等の達成に熱烈に賛成する」ことを約束したハイネであった(二一九頁)。ラーヘル・ファルンハーゲンは、一八三三年三月七日に世を去った。六十三歳であった。「……人生のあれほど長い間にわたってわたしにとって最大の恥辱であり、最も辛い悲しみと不幸であつ

たこと、すなわちユダヤ女性に生まれたことを、今では何にも替えがたいものと思うのです」(二四頁)。ファルンハーゲンは、ラーヘルが死に瀕してこのように語ったと伝えている。そしてこの一節から、アレントは本書を書き出しているのである。

アレントによれば、本書の草稿は、彼女がドイツを立ち去る一九三三年までに、終りの二章を除いて完成していた。そして最後の二章は、一九三八年の夏に書きあげられた。一九五二年に本書を読んだヤスバースは、これら二章が先の十一章と異なるトーンに気付き、アレントに理由を聞いた。それに答えて彼女は、当時の生活の焦立たしさを、またブルーメンフェルトの感化もあって、彼女が受容していた同化に対する「シオニスト的批判」によってそれらが書かれたことを告白している。だが、五八年の序文でアレント自身明瞭に述べているように、「できる限り精確にラーヘルの内省に沿っているし、ラーヘルに対して批判のようなものがなされているように見える場合でもその域を出ることはない。つまり批判はラーヘルの自己批判に照応している」(二〇一―一頁)のである。次の言葉は、まさにこのことを裏書きしていよう。

しかしラーヘルは、実際結論をすべて引き出し、自分の存在根拠を根底的に消し去るつもりだったのか。……世間に合わせて自分をほとんどすべて変えてしまうほど社会の偏見に迎合したにもかかわらず、すぐに「近代のユダヤ人憎悪」に合流することは許されなかった。いかに自分にユダヤ人であることを示すものを残さなくとも、

「偉大で、天才的な神の認識にまで到達した民族(国家の土台に対する警告を示すものだと言いたいのです)の不幸な残滓にいつも」留まることを余儀なくされたのである。ユダヤ人であることをすっかり振り払おうとする試みは、この矛盾とあいまいさによってすべてだめになった。というのも実際に同化したいと思っても、何に同化したいか、何が自分の気に入り、何が自分に気に入らないかを外から選ぶことはできなかったからである。また、キリスト教を受け入れたら、それとともに同時代のユダヤ人憎悪も受け入れねばならなかったからである。二つとも、ヨーロッパ全体の不可欠な構成要素であり、当時の社会の生き生きとした要素であった。自分が属する民族の過去を棄て、ほかの民族の過去を無視した場合、同化は行われなかった。全体としてユダヤ人に対して敵対的な社会では——ユダヤ人が生活していたすべての国では今世紀までそうだった——反ユダヤ主義に同化した場合にのみ同化が可能だったし、ほかのすべての人とまるつきり同じようにふつうの人間になりたいなら、古い偏見を新しい偏見と交換するしかなかったのである。もしそうしなかったら、自分の思いとは反対に叛徒になり——「わたしはやはり叛徒です」——そしてユダヤ人のままであった。(二二五—二六頁)

アレント自身にしても、同化でもなくシオニストでもなく、「叛徒」としての曖昧性が唯一の脱出の途であった。

ところで、「ラーヘルはいつもユダヤ女性として社会の外にいたし、賤民^{レイツ}であった」(二〇一頁)——この「賤民」= *Paria* も、最後の二章でのみ使用されている言葉である。フリードリヒ・G・フリードマンにしたがえば、アレントはこの表現をウェーバーから受け取っているというが、他の箇所はさておき、「ラー

ヘル」ではウェーバーに言及された根拠は示されていない。フリードマンは、ウェーバーの *Paria* がユダヤ教的な宗教性や民族性の外的規定性であるのに対して、アレントはそれとともに *Paria* としてのラーヘルの中に、「ポジティブなもの」を、*der eigentliche Mensch* なるものを認めていることに注意をうながしている。すなわち、「本来的な人間とは、あらゆる曖昧性と矛盾とともにみずからの実存への召命を、自由な決断において引き受けることによって、自己自身を規定するものである」と。ラーヘルにおいて、*Paria* としての生き方は、第一義的には、政治問題となって「人間の尊厳」と「人間の権利」のための闘いとなるべきものであったであろう。しかしながら、「成り上り者になりたいと思う賤民」(二〇二頁)から「賤民の状態に戻りたがっている成り上り者」(二〇三頁)への逆順は、「社会に逆つてそのような現実の存在形式に意識的に反抗する点で、昔の自分の断片に魅せられたように戻り、へ全く内面的」にのみ自分自身の人生を送る」(二〇三頁) 生き方を選ぶに至った。

彼女にとつて *der eigentliche Mensch* は、「真実のリアリテイ」、いかなる社会も今まで人びとから取り上げることができなかった栄光、賤民としての自由、「緑、子供たち、愛、音楽、天気」(二〇五頁)、あるいはラーヘル⁶の生涯の女友人であり唯一の非ユダヤ女性であったパウリーネ・ヴィーゼルと共有していたもの、社会から閉め出されているすべての人の「真実のリアリテイ」——「橋、木、乗馬、香り、微笑み」(二〇三頁)の

うちに再生する。しかも、老年と死へいたる彼女の道は、「排斥されていたので賤民が人生を全体として見渡すことができ、自由な存在のための大きな愛」に至るのと同じ道であったし、それこそが賤民に与えられた「賤民の唯一の威厳ある希望」(二〇八頁)であったという。ユダヤ的パトリアは、パトリア的存在なるがゆえに、そのユダヤ的なるものさえ突き抜けて、人間的なもの、世界への愛に至りつくのであろうか。「ラーヘルは、ユダヤ女性で賤民のままだった。この二つを固持したという理由だけで彼女は、ヨーロッパ人全体の歴史のなかに場を見出したのである」(二二八頁)。アレントの場合もまた同様である。

(1) Elisabeth Young-Bruhl, *Hanna Arendt: For the Love of World*, New Haven and London, Yale University Press, 1982, pp. 38-39. (本書に関しては、訳者寺島俊穂氏が本誌に書評を寄せた。)『法学研究』五七巻第二号一〇九—一七頁)

(2) *Ibid.*, p. 46.

(3) *Ibid.*, p. 76.

(4) サロン時代を通して、ラーヘルは「誰も愛することはできなかったが、多くの人の具えた多様性を愛した」(二二六頁)。これらの人びととの交際、往復書簡によって、彼女の精神形象はより鮮明に描かれる。とりわけ、ヤング・ブリューネルが指摘しているように (*Ibid.*, p. 91)、「ゲント、マルヴィッツ、ハイネは彼女に政治の世界、時代のリアリティを開眼したのであって、これら三人と彼女の思想的世界の形成と構図を中心に本書を読むこともできよう」。

(5) *Ibid.*, p. 91.

(6) Friedrich Georg Friedmann, *Hannah Arendt: Eine deutsche Jüdin im Zeitalter des Totalitarismus*, München und Zürich, R. Piper & CO. Verlag, 1985, S. 27.

(7) Hannah Arendt, *Die verborgene Tradition: Acht Essays*, Frankfurt an Main, Suhrkamp Verlag, Erste Auflage 1976, S. 47. この箇所には「ヨーロッパにおけるユダヤ民族の運命は、圧迫された民族の運命であったばかりでなく、パトリア的民族(マックス・ウェーバー)の運命であったということ……」とあるが、とくにその原典は引用されていない。それ以上のことは筆者には詳らかでない。

(8) Friedmann, *op. cit.*, SS. 27-28.

〔一九八五年・未来社・三二二頁〕

奈良和重